

英語命令文の構造的特性：特に範疇 AUX と COMP の不在を中心として*

澤 田 治 美

1. 序 論

1.0. 英語統語論において、命令文 (imperatives) の構造は、依然として多くの問題をはらんでいる。その最大の問題の一つは、英語命令文に、果して、範疇 AUX と COMP が存在するか否かということであろう。

本稿の目的は、英語命令文を、不定詞節、仮定法現在節といった、他の構文と比較し、とりわけ、「命令文の」(‘imperative’) *do/don't* の特異な文法行動に着目しつつ、次の点を論じる。(i) 英語命令文には範疇 AUX は存在しない。(ii) 範疇 COMP も存在せず、COMP の代りに IMP が存在する。(iii) 「命令文の」*do/don't* は単一語彙項目であり、節点 IMP に支配される。(iv) それらの語彙範疇は S-Prt (Sentence Particle) である。

更に、英語の命令文の四つのタイプの構造を提示し、その構造表示が命令文のためだけの *ad hoc* なものではなく、一般性をもつことを明らかにし、日本語などの OV 言語の「文末」助詞の構造を同一基盤に立って分析し得る可能性をもつことを論じる。

1.1. 命令文の構造の中に、平叙文や疑問文の構造の場合と同じく、範疇 AUX

* 本稿は、昭和55年5月24日、日本文学会第52回大会(甲南女子大学)において、「英語の助動詞体系における imperativ *do/don't* の位置」と題して、そして昭和56年7月30日、“1981 Seoul International Conference on Linguistics”(Hotel Lotte)において、九州工業大学講師、高司正夫氏と共に、“The Structure of English and Japanese Imperatives and Its Implications on Linguistic Universals”と題して研究発表した草稿の一部に大巾な加筆・修正を施したものである。本稿に目を通され、貴重な助言をいただいた高司氏をはじめ、上記の両発表会場で有益な御意見をいただいた方々に深く感謝したい。

を認めるかどうかという問題は、命令文の構造を解明する為のみならず、AUX それ自体をより正確に特徴づける為にも重要といえる。

従来、命令文に関する研究においては、まず、Curme (1931), Jespersen (1940), Kruisinga and Erades (1950'), Zandvoort (1965'), Visser (1969) などの伝統文法的分析は、'structure-oriented' というよりは 'data-oriented' な色彩が強い。そこでは、多くの有益なデータが盛られ、独自の鋭い観察が随所にみられるが、「AUX の設定」といった理論的な問題は議論されてはいない。

一方、生成文法における分析は多様である。一応、次の四種類、すなわち、(a) 「標準理論」的分析 (*e. g.* Katz and Postal (1964), Lees (1964), Hasegawa (1965), Stockwell, *et al.* (1973), 今井・中島 (1978), etc.), (b) Performative Analysis (*e. g.* Sadock (1974), Ukaji (1978), etc.), (c) Pragmatic Analysis (*e. g.* Downes (1977), etc.), (d) Speech Act Theory (*e. g.* Searle (1969), etc), などに分類されよう。そこでは、AUX 範疇に関してもかなり突込んで論究された。

ここで、命令文の内部に、範疇 AUX を設定するか否か、という角度から、命令文に関する幾つかの文献を整理・分類しておくことにしよう。

(1) 〈命令文に AUX を設定する立場〉

- (a) 基底に AUX として “Tense + Modal” を設定する (後で変形により削除)。Katz and Postal (1964), Hasegawa (1965), etc.
- (b) 基底に AUX として抽象的命令形態素 ‘IMP’ / ‘SUBJ’ / ‘ ϕ ’ を設定する。

Lees (1964), Stockwell, *et al.* (1973), Akmajian and Henry (1975), Jacobson (1977), 今井・中島 (1978), Ukaji (1978), etc.

(2) 〈命令文に AUX を設定しない立場〉

Downes (1977), Akmajian, Steele, and Wasow (1979), Sawada (1980), Sawada and Takaji (1982), etc.

(3) その他、「命令文の」*do*, *don't* に関する観察

- (a) *don't* は AUX でなく、Particle である。Cohen (1976).
- (b) *do* は AUX でなく、「特別な」('special') *do* である。

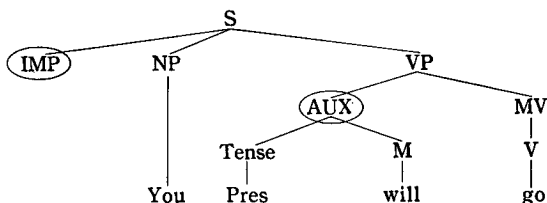
Schmerling (1977)

- (c) *do/don't* は「助動詞」(Lapointe の言う 'aux₁') に属する特別な語彙項目であり、「平叙文・疑問文の」*do* 形式とは異なる実体である。

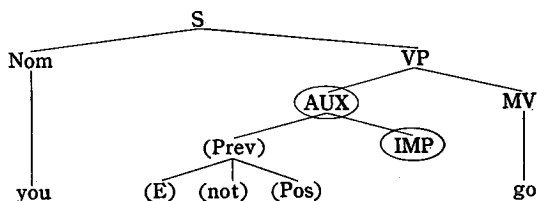
Lapointe (1980)

命令文の構造において、範疇 AUX を設定する立場の中で、以後の命令文の分析法の主な流れを決定した二つの重要な論文は、Katz and Postal (1964) と Lees (1964) とであろう。下図 (4), (5) は、それぞれ、Katz and Postal, Lees による命令文の基底構造を図示したものである。AUX と IMP の位置を明示する為に、それらの節点を○印で囲んでおく。

- (4) Katz and Postal (1964):



- (5) Lees (1964):



(4) では、「命令文変形」が IMP を削除し、又、随意的に *you*, *Pres* + *will*, あるいは単に *Pres* + *will* を削除する (Katz and Postal 1964 : 78-9). 一方 (5) では主語の *you* が随意的に削除される。なお、上の二つの構造において、命令形態素 IMP の位置が大きく異なっていることに注意されたい。これは、「命令文」

を決定づける要素が「文頭」にあるべきか、又は「文中」(AUX の中)にあるべきか、という根本問題にかかわってくる。

2. AUX-less 構造としての英語命令文

2.1. このセクションでは、次の仮説 (6) を提示し、

(6) 英語命令文には範疇 AUX は存在しない。

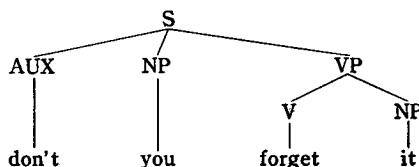
この仮説の帰結として、「命令文の」 *do*, *don't* は AUX に支配されているのではないことを明らかにする。

仮説 (6) に従うならば、たとえば次の否定命令文 (7) の構成素構造は、

(7) *Don't you forget it.*

下の (8) の如き構造 (cf. 今井・中島 1978) とはならない。

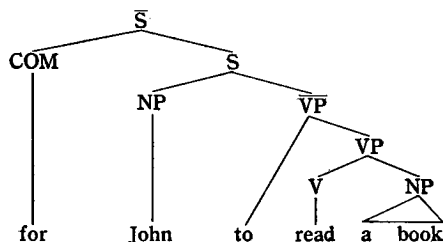
(8)



本稿における 'AUX' の定義は、次のセクションで述べるように、Akmajian, Steele, and Wasow (1979) における定義にしたがう。そして筆者が想定するところの、「範疇 AUX を持たない S」の典型として、不定詞節、仮定法現在節がある (詳しくは Jackendoff (1972), Bresnan (1972), Emonds (1976), Culicover (1976), etc. 参照)。「AUX が無い」という特徴により、命令文、不定詞節、仮定法現在節の、構造的、意味的共通性がより根本的に理解され得るであろう。

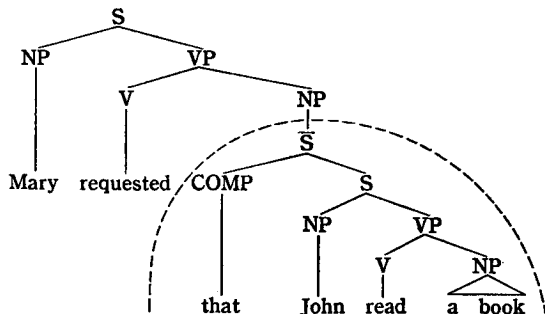
ここでは、*to* 付き平叙不定詞節 *for John to read a book* の基底構造は、(9) の如きものであると想定する。

(9) infinitives



同様にして、仮定法現在節 *that John read a book* の構成素構造を、概略、下の (10) の点線部分（補文）で図示しておきたい。(9), (10) の補文では、いずれも、AUX が無く、逆に COMP があることに注意されたい。この点については後で再び触れる (§. 3 参照)。

(10) subjunctive present



2.2 ここで、一般文法的視野から AUX の定義を挙げておく。本稿では、次の (11) にみられる如く、Akmajian, Steele, and Wasow (1979) の定義を採用する。

- (11) AUX is a category—i. e. distinct in its syntactic behavior from the behavior of other syntactic categories—labeling a constituent that includes elements expressing the notional categories of Tense and/or Modality. (p. 2)

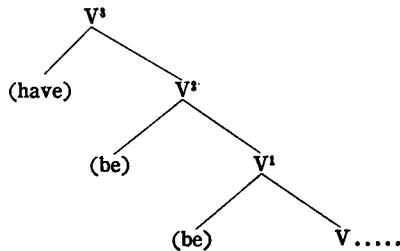
彼等の主張によれば、英語の文法体系においても、上の定義にのっとった、普遍的範疇 AUX が「利用」(‘utilize’) されている。そして、彼等は、いわゆる ‘Phrase Structure Analysis’ (cf. Chomsky (1965), Jackendoff (1972), Emonds (1976), Culicover (1976), Akmajian and Wasow (1975), etc.) と ‘Main Verb Analysis’ (Ross (1967), McCawley (1971), Keyser and Postal (1976), Pullum and Wilson (1977), etc.) を組み込んだ新しい助動詞分析法を提示した。すなわち、彼等の提案する句構造規則——そこでは AUX の存在が主張されている——は、次のとおりである。

(12)

$$\begin{aligned} S &\rightarrow NP \text{ AUX } V^3 \\ \text{AUX} &\rightarrow \begin{cases} \text{Tense } do \\ \text{Modal} \end{cases} \\ V^n &\rightarrow \left(\begin{bmatrix} +V \\ +\text{AUX} \end{bmatrix} \right) V^{n-1} \dots \end{aligned}$$

ここで ‘feature complex’ $\begin{bmatrix} +V \\ +\text{AUX} \end{bmatrix}$ は *have* か *be* で実現する。「完了の」*have* は V^2 補部 (complements) を必要とするように厳密に下位範疇化され、「進行の」*be* は V^1 補部を必要とし、そして、「受身の」*be* は必ず、主動詞を従えなければならない。それゆえ、(12) の句構造規則は次の (13) にみられように、三層の動詞句を生成することになる。

(13)



この階層は極めて厳格なものであり、この層序により、英語の助動詞の相互承接順序が規定されているという。

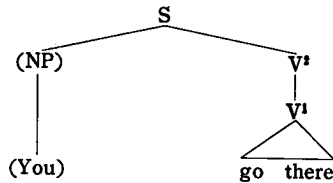
一方、命令文については、平叙文や疑問文の場合 (12) とは独立して、次の (14) の句構造規則を提案した。

(14) PS Rule for Imperative Sentences

$$S \longrightarrow (NP) V^2$$

(14) では、AUX が無く、動詞句も V^2 レベル以下に限定されており、前出の (12) の場合とは根本的に異なっている。平叙文 / 疑問文の構造と対比的に、命令文の構造を図示してみれば、次の (15) の如く示されよう。

(15) imperatives



彼等の分析法の問題としては、まず第一に、「完了命令文」が生成されなくなる
こと、次に、「命令文の」 *do*, *don't* の範疇が不問に付されていることが挙げら
れる。本稿のアプローチは、このような問題点も解決し得る。

2.3. 以下、英語命令文においては AUX が存在しないことを示す四つの証拠を
提出し、先に挙げた仮説 (b) を証明する議論を行う。

2.3.1. まず第一に、英語命令文においては、Tense も Modals も存在しない。
次の例文参照。

(16) a. (You) $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{be} \\ *are \end{smallmatrix} \right\}$ quiet. (imperative)

b. Somebody $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{drink} \\ *drinks \end{smallmatrix} \right\}$ this milk. (imperative)

- (17) $\left\{ \begin{array}{l} *Will \\ Would \\ Can \\ Could \end{array} \right\}$ sign this paper, please.

(16a) では *are* は非文法的である。(16b) では, *drinks* は許されない。そして, (17) が示していることは, 命令文には, いかなる Modals も起こらないということである。すなわち, 英語命令文には, AUX (=Tense and/or Modality) は存在しない。それゆえ, 次の文 (18) の *do/don't* は AUX の *do/don't* とは異なる種類のものであると結論づけられる。

- (18) $\left\{ \begin{array}{l} Do \\ Dont \end{array} \right\}$ go !

同じく, 不定詞節・仮定法現在節にも Tense や Modals は現れない。なお, 次の文 (19) におけるように, 「仮定法の」*should* が生起している節は平叙文とみなし, 仮定法現在節の定義に含まれないものとする (荒木・小野・中野 1977)。

- (19) I suggest [that John *should* go]. (Br. E.)

2.3.2 第二に, “Do Replacement” 規則は, 命令文においては作動しない。“Do Replacement” (Emonds (1976) のいう ‘Verb Raising’) とは, 基底構造において, AUX の *do* が *have* 又は *be* と共起する際には, *have* 又は *be* が *do* に取って代る (そして AUX の座を占める) という規則であり, 平叙文や疑問文では obligatory である。次の (20) ~ (21) で, a 文は b 文に必ず転換されなければならない。

- (20) a. *John did be a teacher.

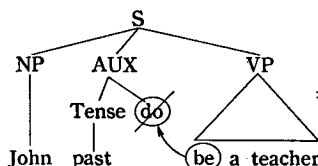
b. John was a teacher.

- (21) a. *Mary does have gone to church.

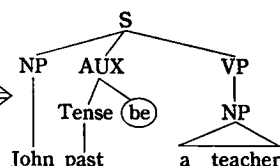
b. Mary has gone to church.

今, (20a) から (20b) への派生における “Do Replacement” のプロセスを図示するならば, 次の如く示されよう。*do* と *be* の位置に注意されたい。

(22) a.



b.



さて、ここで重要なことは、“DO Replacement” は、命令文に関する限り、適用されないということである。すなわち、適切な文脈下では、「命令文の」*do*, *don't* は、*be* とはもとより、完了の *have* とも共起し得るようである。次例参照。

(23) a. *Do be* ambitious.b. *Do be* here when the boss comes in.c. *Don't be* sitting on the desk when our teacher comes in.d. *Don't be* hurt by what she says.(24) a. *Do have* done with this nonsense! (Curme 1931 : 436)b. *Don't have* been told anything about it! (DeMorgan: *The Old Madhouse*) (Curme 1931 : 436)c. Please *don't have* eaten everything by the time I get back. (Schachter 1978 : 206)d. Please, Neale, *don't have* read it yet! (Bolinger : 1967 : 350)e. *Don't have* hit your head, please. (Parent upon hearing a crash in back room.) (Downes 1977 : 86)

上の完了命令文 (24) の諸例において、*do* よりも *don't* の方が圧倒的に多い (詳しくは、Bolinger (1967 : 35) 参照) が、この制約は、統語論的なものではなく、「命令文の意味内容は実現済みであってはならない」といった。「命題内容条件」(Searle (1969)) から引き出される意味論的・語用論的なものであると考えておきたい。¹⁾

1) Downes (1977 : 86) は、命令文に課される条件は “hypotheticalness”, すなわち、「話者がその行為を verify していないということ」であるという。

いずれにせよ、(23)～(24)のデータを最も自然に説明する方策は、Culicover (1976: 150) が指摘する如く、命令文には AUX が存在しないので、“Do Replacement” は不発に終わらざるを得ないと想定することである。そして、ここでもまた、(23)～(24)の *do/don't* は AUX の *do/don't* とは異なるものである。そして、「命令文」*do/don't* と共起する *be* や *have* は VP 内に留まっている。

同様に、不定詞節、仮定法現在節においても、“Do Replacement” は不発に終る。すなわち、それらの節内の *be* や *have* は AUX とはなり得ず、V のままである。次の例参照。

(25) [For you not to *have* gone there].

(26) It is imperative [that you not *be* seen here].

このことは、上の節内の *have* や *be* に対して、文否定辞 *not* がすぐ後続するのではなく、先行していることからわかる。仮に、これら *have* と *be* が AUX 要素ならば、この *not* はこれらの語に後続するはずだからである。

2.3.3. 第三に、次の文を考えてみよう。

(27) Let's $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{don't} \\ \text{do} \end{smallmatrix} \right\}$ talk about it now. (Nonstandard Am. E.)

今、仮に、(27)における、「命令文の」*do/don't* が AUX だと考えるならば、「一人称命令文」である *let's* 文の *let's* の後には AUX 成分が現われていることになる。しかしながら、*let's* の後には、AUX の成分 Modals は現われ得ない。

(28) *Let's $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{shall} \\ \text{will} \end{smallmatrix} \right\}$ talk about it now.

それゆえ、「命令文の」*do/don't* は AUX 成分ではないと考えられ、又、「一人称命令文」たる *let's* 文にも AUX 範疇は存在しないと結論づけられよう。なお、この結論は、(27)の異形である (29) にも成立する。

(29) * $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{Don't} \\ \text{Do} \end{smallmatrix} \right\}$ let's talk about it now. (informal and esp. Br. E.)

2.3.4. 第四の論証は「強調不変化詞」(Emphatic Particles) *too* と *so* に関係している。これらの不変化詞は通例、その文の命題内容を強調する為に使われる。たとえば、次のに会話おいて、

(30) Speaker A: Einstein didn't visit Kyoto.

Speaker B: He did TOO/SO visit Kyoto.

話し手 B は話し手 A に反論し、自分の主張内容（「アインシュタインが京都を訪れたということ」）の真実性を強調している（Charleston (1960), 大沼 (1981), etc. 参照）。(以下 の例文では、TOO/SO は大文字で表記する。)

統語論的には、Jackendoff (1972 : 345-6), Emonds (1976 : 213-6) などにおいて論じられているように、これらの語は、構造上、AUX に後続して現われなければならないという条件がある。以下の文のすべてにおいて、*can*, *was*, *have* は AUX として機能しているが、それぞれの組の最初の用法のみが適格である。すなわち、*too*, *so* は +[AUX_(VP)] といった subcategorization feature を与えられる。

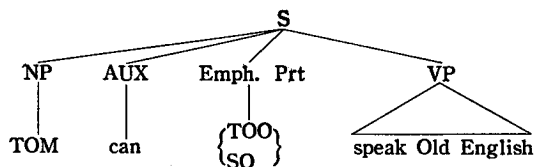
(31) Tom { can TOO/SO }
 {*TOO/*SO can} speak Old English. (emphatic)

(32) She { was TOO/SO }
 {*TOO/*SO was} moved with this story. (emphatic)

(33) I { have TOO/SO }
 {*TOO/*SO have} seen the wind. (emphatic)

上の (31) の文法的な例文、*Tom can TOO/SO speak Old English* は、概略、次の (34) の如き構造をしていると考えられよう。

(34)



では、命令文においてはどうかだろうか。予想どおり、強調辞 *too, so* は命令文の中には現われない。話者 B の答え参照。

(35) Speaker A: I won't run.

Speaker B: *Do TOO/SO run, please.

それゆえ、命令文における、*too, so* の生起不可能性は、(i) 英語命令文には AUX がなく、(ii) 「命令文の」 *do* は AUX 要素ではない、と仮定するならば、極めて自然に説明されよう。

こういった説明が正鵠を射ていることは、AUX をもたない S と推定される。不定詞節・仮定法現在節にも、これらの強調不変化詞が現われないことから裏付けられる。

(36) *[For me to have TOO/SO seen the wind].

*It is imperative [that you be TOO/SO silent here].

さて、命令文、不定詞節・仮定法現在節から、強調不変化詞 *too, so* が一貫して排除されるということは意味論的にも充分理由のあることである。すなわち、それら三者には、AUX によって表示される、話者の、発話に対する心的態度、すなわち Modality が明示されていないということである。*too, so* は、話者の心的態度のうち、「断定」、「主張」を強調するのであるから、そのような心的態度が明示されていなければ、存在理由を失い、生起しない。

命令文（の命題内容部分）、不定詞節、仮定法現在節に Modality が明示されない、という筆者の主張は、更に、次のような意味的事象をも、統一的に説明し得るものと考えられる。

ひとつは、「文副詞類」(Sentence Adverbials) が命令文、不定詞節、仮定法現在節には極めて現われにくいということである) Katz and Postal (1964), 今井・中島 (1978), 更に澤田 (1978), etc. 参照)。

(37) * $\left. \begin{array}{l} \text{Surely} \\ \text{In fact} \\ \text{Perhaps} \end{array} \right\}$, leave for Tokyo tomorrow.

(38) *It is essential [for the troops $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{surely} \\ \text{in fact} \\ \text{perhaps} \end{smallmatrix} \right\}$ to leave for
Tokyo tomorrow].

(39) *The general commanded that the troops $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{surely} \\ \text{in fact} \\ \text{perhaps} \end{smallmatrix} \right\}$ leave
for Tokyo tomorrow].

次に、命令文の命題内容部分が、不定詞節、仮定法現在節を用いてパラフレーズされ得るという事実が挙げられる。

(40) [IMP] [(you) attend the meeting].

(41) It's $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{imperative} \\ \text{mandatory} \end{smallmatrix} \right\}$ $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{[for you to attend the meeting]} \\ \text{[that you attend the meeting]} \end{smallmatrix} \right\}$.

以上論じたところにより、これら三つの構文には、AUX が存在しないと結論される。

3. COMP-less 構造としての英語命令文と、「命令文の」*do/don't* の categorical status

3.0. 前セクションで挙げた四個の証拠は、仮説 (6) —便宜上 (42) として再述— を支えるものであった。

(42) 英語命令文には範疇 AUX は存在しない。(=(6))

仮説 (6) は必然的に、「命令文の」*do*, *don't* が AUX 成分ではないことを含意する。

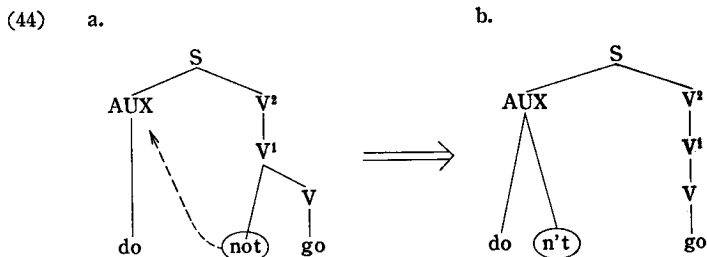
このセクションでは、(i) 「命令文の」*do*, *don't* が単一の語彙項目であること、(ii) それらが抽象的範疇 IMP に支配される Sentence Particle (S-Prt) であること、を論じる。

3.1. 仮説 (6) を受けて、ここでは、次の想定 (43) を提出する。

(43) 「命令文の」*do*, *don't* は、それ自体、単一の語彙項目である。

(43) の想定で重要なことは、否定命令文を導く *don't* は、*do+not* の連鎖から、‘Neg Contraction’ の適用によって派生されるのではないという事実である（更に詳しくは Lapointe (1980) 参照）。

ここで、Culicover (1976). Akmajian, Steele, and Wasow (1979) に従い、‘Neg Contraction’ は二段階の step を踏むと想定してみよう。(i) *not* を *n't* に縮約する。(ii) *n't* を AUX に移す。仮に、否定命令文の *don't* が AUX 成分だとした場合（平叙文や疑問文の *don't* ならば AUX 成分であるが）、次のプロセスが仮定される。



しかしながら、命令文には AUX が存在しないのであるから、この Neg Contraction は適用されようがなく、*don't* は、はじめから、一個の語彙項目であると結論される。

3.2. 更に筆者は次の想定 (45) を提出する。

(45) 「命令文の」 *do*, *don't* は統語的節点 IMP に支配される S-Prt である。

ここで、範疇 IMP について論じておきたい。

よく知られているように、Bresnan (1970, 1972) は、英語の補文化標識 COMP に関して極めて重要な研究を公にし、英語の統語論の中に次のような句構造規則を提案した。

(46) $\bar{S} \rightarrow \text{COMP } S$

この分析によるならば、すべての文は、基底構造において、文頭要素 COMP をもつことになる。そして、COMP のメンバーは、次のような（抽象的な）語である。

(47) COMP \longrightarrow *that, for, WH, ……*

これらの語は各々、独自の機能と意味を有する。たとえば、*that* は平叙 *that* 節を、*for* は（主語付きの）平叙 *to* 不定詞節を、そして、*WH* はすべての形の疑問文を導く。

Bresnan (1970 : Note 16) は、命令文にも COMP は存在し、その語彙項目は *for* である旨を述べている。しかし、本稿はこのような考え方はとらない。なぜなら、(i) 命令文は埋め込みの可能性が無いので、COMP 節点は不要である。(ii) 仮に *for* が命令文の COMP として仮定されるならば、次のような非文法的な '*for you + to VP*' 命令文を作り出してしまう (*for* は必ず *to* 付きの不定詞をとる)。

(48) **For you to open the door, please. (Imp)*

(iii) 命令文には、*do, don't* が現われるが COMP の *for* は、「命令文の」*do, don't*, あるいは *let's* などと共起しない。すなわち、COMP と「命令文の」*do, don't* とは incompatible である。

(49) *For $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{don't} \\ \text{do} \end{smallmatrix} \right\}$ (let's) to open the window, please.

(iv) *for* は「仮想的」('hypothetical') な命題態度を表し (Bresnan 1972), 「命令」, 「要求」, 「禁止」などを表わすことはできない。

そこで本稿では、次の仮説を提出する。

(50) 英語命令文には、範疇 COMP は存在せず代りに範疇 IMP が存在する。

かつて、Katz and Postal (1964) は、命令文、疑問文に、それぞれ、抽象的形

態素 IMP, Q を仮定した (本稿 (4) の構造参照のこと)。その後, Q は Baker (1970), Bresnan (1970, 1972) を経て, COMP 体系に統合されたが, IMP はそうはされなかった。

仮説 (50) に従うならば, 英語の句構規則には, 次の (51) のような規則が存在する (IMP は Root S にしか現われないものとする)。

$$(51) \quad \overline{S} \longrightarrow \left\{ \begin{array}{c} \text{COMP} \\ \text{IMP} \end{array} \right\} S$$

伝統的に, 英語の文は, (a) 平叙文, (b) 疑問文, (c) 感嘆文, (d) 命令文の四種に分類されてきた。しかし, 本稿のアプローチに従うならば, それらは, まず大きく, 「COMP 文」と「IMP 文」とに分類され得る。前者の中には, 平叙文, 疑問文, 感嘆文が, 後者の中には命令文が含まれる。

上の仮説 (50) と, 既に提出した仮説 (6) とを統合するならば, 「命令文は, AUX も COMP もたず, IMP のみをもつ」と特徴づけられる。こういった特徴づけを, より具体的に, 不定詞節, 仮定法現在節との比較の中で提出するならば, 次のとおりである。

(52)

categories sentences	COMP	IMP	AUX
Infinitives	+	—	—
	(for, WH)		
Subjunctives present	+	—	—
	(that)		
Imperatives	—	+	—

3.3. 想定 (45) で述べたように, 筆者は, 「命令文の *do*, *don't* (そして, *let's*) は Sentence Particle であると考え (Sawada 1980, Sawada and Takaji (1982) 参照)。Cohen (1976) は, 次のような否定命令文 (53) は,

(53) Don't you dare kiss my wife. (Imp)

下の文 (54) のような基底文から ‘Subject-AUX Inversion’ によって派生されたのではないと論じ、文 (53) の文頭の *don't* は AUX ではなく Particle であると結論づけた。

(54) **You don't* dare kiss my wife. (Imp)

本稿では、Cohen (1976) の分析をさらに押し進め、*don't* のみならず、*do*、そして *let's* も Sentence Particle であると想定する。この意味では、上述した COMP の諸要素、たとえば、*that, for, if, as, whether* など particles とみなしてよいであろう。事実、Bresnan (1974) は COMP の中のある要素を ‘clause-particles’ と呼んでいる。本稿では、これらの語を Sentence Particle とみなし、範疇 S-Prt で表示する。

範疇 S-Prt が理論言語学上、普遍的範疇となり得るかは、今後の考察にまたなければならない。しかしながら、「終助詞」、「間投助詞」が豊富に、かつ、体系的に存在している日本語、朝鮮語などの文構造を考慮に入れるならば、S-Prt が英語の命令文にのみ仮定される特殊な範疇でないことは確かである。渡辺 (1971: 1971) には、終助詞と間投助詞の類（両者は連続的なもの一すなわち Ross のいう ‘squish’ の状態—とされる）が、相互承接の順序関係から、次の如く分類されている。

(55)

種 \ 類	第 1 類		第 2 類	第 3 類
甲 種	か	さ	よ (い)	ね (な)
乙 種	わ ぞ (ぜ) な (禁止)			

ここで試案的ながら、S-Prt の特徴を次の如く挙げておきたい。

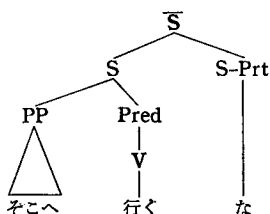
- (56) a. \bar{S} に支配され、文頭 (VO 言語)、又は文尾 (OV 言語) に位置し、
S/VP/Pred P など (=「命題内容」) を導入する。

- b. inflection がない。
- c. 否定の scope に含まれず, contrastive stress を受けない。
- d. その文の「命題内容」に対する話者の態度, もしくは, 「発話内の力」('illocutionary force') を表わす。

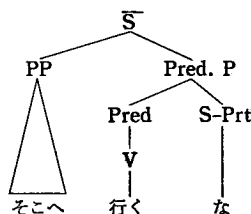
この特徴づけに従うならば, たとえば, 次の日本語命令文 (= 禁止) (57) の基底構造は (58 a) で, 表層構造は (58 b) で表示され得るかもしれない。

(57) そこへ行く な。

(58) a.



b.

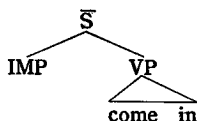


(58a) は, Predicate Raising (「述語繰り上げ」)——この場合は, 「行く」を「な」の左側に adjoin し, 全体でより大きい単位としての Pred. Phrase を派生する——を経て (58b) となると想定するが詳しくは別稿にゆずる。

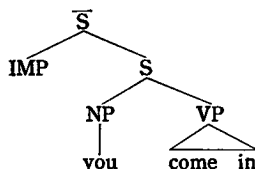
3.4. では, 以上論じた, いくつかの仮説・想定にもとづいて, 英語命令文の構造を図示しておきたい。構造は以下四タイプに分類される。

まず, 抽象的節点 IMP が 'empty' である場合は, (59) と (60) で示されよう。前者は主語の無い構造, 後者は主語 (*e. g. you, somebody, etc.*) をもつ構造である。

(59)

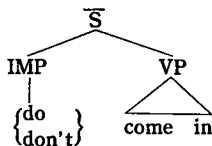


(60)

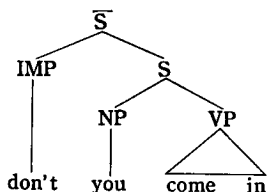


次に、IMP が *do/don't* という語彙項目を支配している場合。これも、主語の無い構造と、主語 (*e. g. you, anybody, etc.*) をもつ構造とに分かれる (現代英語では、*do* の後には主語は現われないのが普通である)。²⁾

(61)



(62)



上の構造のうち、主語の無いタイプの場合、すなわち (59) と (61) において、 \bar{S} は VP を直接支配していることに注意されたい。すなわち、本稿では、 \bar{S} は S のみではなく、VP をも支配し得ると想定している。この主張を句構造規則で示すならば、次の如くだろう。

$$(63) \quad \bar{S} \longrightarrow \text{IMP} \left\{ \begin{array}{c} \bar{S} \\ \text{VP} \end{array} \right\}$$

実のところ、筆者は、COMP の場合においても、次の如き句構造規則を想定する。

$$(64) \quad \bar{S} \longrightarrow \text{COMP} \left\{ \begin{array}{c} \bar{S} \\ \bar{\text{VP}} \end{array} \right\}$$

この式における $\bar{\text{VP}}$ とは、*to* 付きの不定詞を表わす。不定詞構文においても、必ず主語を必要とする場合と、決して主語をとってはならない場合とがあることに注意されたい。たとえば、COMP が *for* の場合、必ず *to* 不定詞の主語を必

2) 「命令文の」*do* の後に主語の *you* がくる文は現代英語では非文とされるが、より古い英語では許されている (Visser (1969) 参照)。

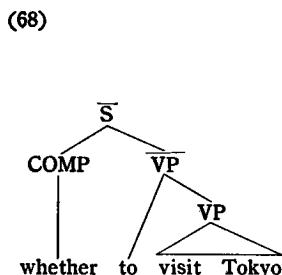
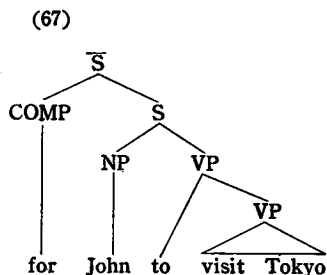
(i) *Sophy, do you be a good girl.* (1749. Fielding: *Tom Jones*) (Visser 1969)

(ii) *Do you wait in patience.* (1894. Th. Hardy: *Life's Little Ironies*) (*ibid.*)

要とし、COMP が *WH* (e.g. *whether*) の場合は逆に、決して主語をとってはならない。このような構造を、Chomsky (1981) における、‘empty category’ *PRO* を使わない枠組み (たとえば, Brennan (1978)) で表示するならば、平叙不定詞節 (65) の基底構造は (67) で、そして、疑問不定詞節 (66) の基底構造は (68) で示されよう。

(65) for $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{John} \\ *_{\phi} \end{smallmatrix} \right\}$ to visit Tokyo.....

(66) whether $\left\{ \begin{smallmatrix} *_{\text{John}} \\ \phi \end{smallmatrix} \right\}$ to visit Tokyo.....



以上の分析におけるように、「はだか不定詞」を VP で、「*to* 不定詞」を \bar{VP} で表示するならば、(i) IMP は VP を、COMP は \bar{VP} を必要とする、(ii) IMP も COMP も、S をとってもとらなくてもよい (すなわち、主語は optional である)、(iii) 「主語削除規則」を設ける必要がない、といったことが一般性をもって説明されるようになる。

4. 結 論

これまで本稿で論じてきたことは、(i) 現代英語の命令文には範疇 AUX は存在しない、(ii) 範疇 COMP も存在せず、代りに範疇 IMP が存在する、(iii) 「命令文の」 *do*, *don't* は単一の語彙項目であり、構造上、IMP に支配される、(iv) それらの語彙範疇は S-Prt である、(V) このような分析は英語文法とい

う個別文法において妥当性をもつと同時に、日本語などの OV 言語の文末助詞の統語論的・意味論的諸特性を説明する上で一般性を獲得しうる可能性がある、といったことであった。

一般的に言って、現代英語においては、ある範疇（たとえば、V, AUX）がその範疇上の特性の一部、更には全部を失って、パーティクル化してゆく現象がかなり多く観察される。³⁾ Sawada and Takaji (1982) はこの現象を「パーティクル化」(‘particlization’) と呼んだ。

この現象は、日本語においても極めて顕著である。たとえば、田中 (1973) のいう「文表現の成立に参加する文末助詞」の大部分はパーティクル化によって終助詞しつつあるものといえるであろう。たとえば、「の」、「こと」は本来「形式名詞」(松下文法)であるが、文末助詞として機能しはじめ、「質問」や「命令」などを表現し、もともと「接続助詞」であった「て」は文末パーティクル化し、「依頼」、「質問」を意味する。命令表現専用の「一なさい」、「一たまえ」も動詞からパーティクル化しつつあるといえよう（より詳しくは Sawada and Takaji (1982) を参照のこと）。⁴⁾

このような線に沿って考えてみる時、英語の COMP, IMP に代表される「文頭」表現体系と、日本語の助動詞、終助詞の「文末」表現体系の相互の比較は、極めて興味深い言語類型論・対照言語学のテーマを約束してくれるように思われる。

(昭和57年8月、静岡にて)

3) このような観点からみれば、次の命令文の文末に付加されている *do* は、S-Prt の「独立用法」とでも言えよう。

(i) “And hurry up, *do*,” She told him. (1959. Norman Collins: *Bond Street Story*) (Visser 1969)

4) たとえば、次の文で、命令形 (i) の両文は自然だが、終止形 (ii) の両文は、明らかに不適格である。すなわち「一なさい」、「一たまえ」は活用しないと考えられる。

(i) a. おまえはもっと本を読みなさい。

b. 君はもっと働きたまえ。

(ii) a. *おまえはもっと本を読みなさる。

b. *君はもっと働きたまう。

BIBLIOGRAPHY

- Akmajian, A., S. M. Steele, and T. Wasow. 1979. "The Category AUX in Universal Grammar." *Linguistic Inquiry* 10, 1-64.
- Akmajian, A. and F. Henry. 1975. *An Introduction to the Principles of Transformational Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Akmajian, A. and T. Wasow. 1975. "The Constituent Structure of VP and AUX and the Position of the Verb BE." *Linguistic Analysis* 1, 205-45.
- 荒木一雄・小野経男・中野弘三. 1977. 『現代の英文法 9・助動詞』. 東京: 研究社.
- Baker, C. L. 1970. "Notes on the Description of English Questions: the Role of an Abstract Morpheme." *Foundations on Language* 6, 197-219.
- Bolinger, D. 1967. "The Imperative in English." *To Honor Roman Jakobson*. The Hague: Mouton.
- Bresnan, J. 1970. "On Complementizers: Toward a Syntactic Theory of Complement Types." *Foundations on Language* 6, 297-321.
- . 1972. *Theory of Complementation in English Syntax*. Ph. D. Dissertation, MIT.
- . 1974. "The Position of Certain Clause-Particles in Phrase Structure." *Linguistic Inquiry* 5, 614-19.
- . 1978. "A Realistic Transformational Grammar." *Linguistic Theory and Psychological Reality*. Ed. by M. Halle, J. Bresnan, and G. A. Miller. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Charleston, B. M. 1960. *Studies on the Emotional and Affective Means of Expressions in Modern English*. Bern: Franke.
- Chomsky, N. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- . 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris Publications.

- Cohen, A-R. 1976. "Don't You Dare!" *Harvard Studies in Syntax and Semantics*. Ed. by J. Hankamer and J. Aissen. 175-96.
- Culicover, P. W. 1976. *Syntax*. New York: Academic Press.
- Curme, George O. 1931 *Syntax*. Boston: D. C. Heath and Company.
- Downes, W. 1977. "The Imperative and Pragmatics." *Journal of Linguistics* 13, 77-97.
- Emonds, J. E. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*. New York: Academic Press.
- Hasegawa, Kinsuke (長谷川欣佑). 1965. "English Imperatives." 『中島文雄教授還暦記念論文集』. 東京: 研究社.
- 今井邦彦・中島平三・1978.『現代の英文法 5. 文Ⅱ』東京: 研究社.
- Jackendoff, R. S. 1972. *Semantic Interpretations in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jacobson, B. 1977. *Transformational Generative Grammar*. Amsterdam: North-Holland.
- Jespersen, O. 1940. *A Modern English Grammar on Historical Principles* (Part V.) Copenhagen: Ejnar Munksgaard.
- Katz, J. J. and P. M. Postal. 1964. *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Keyser, S. J., and P. M. Postal. 1976. *Beginning English Grammar*. New York: Harper & Row.
- Kruisinga, E. and P. A. Erades. 1950⁷. *An English Grammar* (Vol. 1.) Groningen: Noordhoff.
- Lapointe, S. 1980. "A Lexical Analysis of the English Auxiliary Verb System." *Lexical Grammar*. Ed. by T. Hoekstra, H. van der Hust, and M. Moortgat. Dordrecht: Foris Publications.
- Lees, R. B. 1964. "On Passives and Imperatives in English." 『言語研究』. 46, 28-41.

- McCawley, J. D. 1971. "Tense and Time Reference in English. *Studies in Linguistic Semantics*. Ed. by C. Fillmore and D. T. Langendoen. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- 大沼雅彦. 1981. 「辞書と文体」. 『英語青年』127: 1, 19-20. 東京: 研究社.
- Pullum, G. and D. Wilson. 1977. "Autonomous Syntax and Analysis of Auxiliaries." *Language* 53, 741-88.
- Ross, J. 1967. "Auxiliaries as Main Verbs." *Studies in Philosophical Linguistics*. Ed. by W. Todd. Evanston, Ill.: Great Expectations.
- Sadock, J. M. 1974. *Toward a Linguistic Theory of Speech Acts*. New York: Academic Press.
- 澤田治美・1975. 「日英語主観的助動詞の構文論的考察—特に表現性を中心として—」『言語研究』68, 75-103.
- . 1978. 「日英語文副詞類 (Sentence Adverbials) の対照言語学的研究—Speech Act 理論の視点から—」. 『言語研究』74, 1-36.
- . 1980 a. 「日本語『認識』構文の構造と意味」. 『言語研究』78, 1-35.
- . 1980 b. 「用言としての日本語助動詞」. 『佐藤茂教授退官記念—論集国語学』. 437-57. 東京: 桜楓社.
- . 1980 c. "The Category Status of Imperative *DO*, *DON'T*, and *LET'S* in English Modality System." *Descriptive and Applied Linguistics* 13, 137-51.
- . and Masao Takaji. (1982). "The Structure of English and Japanese Imperatives and Its Implications on Linguistic Universals." *The Linguistic Journal of Korea* 5, 31-56.
- Schmerling, S. F. 1977. "The Syntax of English Imperatives." Unpublished manuscript. The University of Texas, Austin.
- Searle, J. R. 1969. *Speech Acts*. London: Cambridge University Press.
- Stockwell, R. P., P. Schachter, and B. H. Partee. 1973. *The Major Syntactic Structures of English*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 田中章夫. 1973. 「終助詞と間投助詞」. 『品詞別日本文法講座・助詞』東京: 明治書院.

- Ukaji, Masatomo (宇賀治正朋). 1978. *Imperative Sentences in Early Modern English*. Tokyo : Kaitakusha.
- Visser, F. Th. 1969. *An Historical Syntax of the English Language*. Part III.) Leiden : E. J. Brill.
- 渡辺実. 1971. 『国語構文論』. 東京 : 塙書房.
- Zandvoort, R. W. 1965¹. *A Handbook of English Grammar*. London : Longmans.

**The Structural Properties of English Imperatives : Mainly
Concerning the Absence of the Categories AUX and COMP**

Harumi SAWADA

One of the most important theoretical problems of English imperatives is concerned with whether we can postulate the category AUX and the category COMP in them as in declaratives or interrogatives. The solution of the problem leads to a clearer characterization of AUX and COMP in English grammar in general, and to a correct understanding of the categorical status of 'imperative' *do* and *don't*.

In this paper I analyse the structure of English imperatives making a comparison between them and English infinitives or subjunctives present, and argue for the following points :

- (a) There is no AUX in English imperatives (or in English infinitives and subjunctives present).
- (b) There is the category IMP, instead of COMP, in English imperatives.
- (c) 'Imperative' *do* and *don't* are dominated by IMP, not by AUX, and their lexical category is S-Prt (=Sentence Particle).

- (d) The *do* and *don't* are single lexical items with their own semantic content.

Furthermore, I argue that the postulation of the category S-Prt helps explain some syntactic properties of *why* of '*why (not)* sentences' or *let's* in English, and those of various sentence-final particles like *na*, *ka*, etc. in Japanese from a typological point of view.